

アメリカにおける中国都市文化研究の現状

汪 利 平
(高畑 幸 訳)

要 旨

過去20年にわたり、アメリカにおける中国研究は都市史の分野において活気に満ちた発展を見せ、この分野で非常に多くの書籍や論文が出版された。新たな研究潮流は、過去5世紀、特に清時代と民国期の中国都市社会に焦点を当てる傾向がある。先行研究を紹介する本稿では、はじめに、このような研究上の発展があった理由を分析し、次に、民国および帝政後期の中国における中国都市研究の重要な潮流および研究をそれぞれ紹介していく。そして、中国都市史研究のさらなる発展に向けての批判的視点および提言を示した。

キーワード：中国都市，中国都市史，アメリカにおける研究，帝政後期の中国，民国期の中国

1. はじめに

過去20年間にわたり、アメリカ合衆国における中国研究は都市史研究分野で急速に発展し、多くの書物や論文が出版されてきた。これらの研究は過去5世紀の時代、特に清代と民国期における中国都市に集中する傾向にある。本稿では、こうした研究の発展の要因を分析し、民国期と帝政後期の重要な研究動向と業績を紹介したい。

中国都市史研究がアメリカで盛んになったのには2つの理由があるようだ。ひとつには、アメリカの伝統的学問潮流の発展、もうひとつは、中国本土での社会政治状況の変化である。前者についていえば、1980年代の都市歴史研究のはじまりは、伝統的な西洋中心主義への反発にあった。長い間、アメリカの知識人はマックス・ウェーバーなど西洋哲学者の思想に影響を受けてきた。すなわち、前近代の中国は経済的、社会的、政治的に停滞していたというものである。

これは、中国が農業社会だからという理由にとどまらない。さらに重要なのは、伝統的な中国都市では、社会全体を近代化に向けて牽引する要素が欠けていたという理由だろう。

この視点に呼応し、ジョン・K・フェアバンク (John K. Fairbank) の世代の中国史研究者は「西洋の衝撃 中国の反応」理論を提唱した。このモデルでは、19世紀から中国で起きた変化は、内的な力に起因するのではなく、むしろ外的要素によって誘発されたものと解釈される。中国は、増し続ける西洋からの圧力に反応していただけなのである。こうした考えが支配的になると、中国の近代都市の歴史に関するいくつかの研究が、西洋によって支配された条約港・上海がいかに中国近代化の鍵となったのか、という問題に焦点を当てたのは驚くべきことではない¹⁾。

1980年代において、歴史家の若い世代のあいだで、「中国都市は近代化を牽引する活力と発展が欠けていたのではない」ことを証明しよ

うとする努力がなされた。ウィリアム・ロウ (William Rowe) が漢口に関して出版した2冊の本 (1985年, 1989年発行) には, そのような努力が表現されている²⁾。ロウが選んだのが, 沿海地帯から遠く離れ, 「天下の真ん中」に位置する都市であったことが目を引く。清代, 漢口が商業の中心地として確固たる地位を築くまでの過程を詳細に研究し, この内陸都市が急速な発展をとげたのは, 長江を介した長距離通商の繁栄に起因するとロウは指摘した。

さらに, 漢口はウェーバーがいうところの官僚が支配する東洋の行政的中心地ではなく, 典型的な商業の中心地であった。漢口の台頭は, 行政機能よりもむしろ通商の戦略的な位置によるものであろう。さらに, 主に商人で構成される地方エリートは, 都市生活において重要な役割を果たした。商人とその組織は地域にしっかりと根を下ろし, インフラ整備や慈善事業といった都市運営にも積極的に参加した。

ロウによると, 19世紀中葉までにこうした自治的活動が漢口で発展し, それは17世紀のヨーロッパ都市でみられたような「公共領域 (public sphere)」の初期段階に類似しているという。ハーバーマスの定義によると, 「公共領域」とは市民が共同体の利益のために自主的に自らを組織することのできる空間である。それは国家から独立しているところが特徴的で, また国家と対立することも可能である。公共領域は市民社会の発展, さらに近代民主主義社会の構成に欠かせない役割を持っている。公共領域の概念を持ち込むことで, ウィリアム・ロウは, 18世紀および19世紀の漢口は近代社会へ向かう重要な変化を経験し, それは西洋からの影響ではなく内発的なものだったと論じている。

もし, 中国都市におけるこうした公共領域の発展が近代の国内的・国際的要因により破壊されていなければ, 中国は自力で近代民主主義社会となることができたであろう, という想像力を働かせる人がいるかもしれない。このような視点は, 確かに停滞した中国という古びたイメージの土台を覆すものである。しかし, ヨーロッパ史における理論と概念を大胆に適用したことは, アメリカの中国史研究者のあいだに議論をまきおこした。その議論とは, 西欧の歴史

経験から生み出された理論が, 中国史を解釈する上で適切かどうか, 中国における国家と社会の関係をどう理解するかというものだ。中国語でいう「公」が, 英語の「パブリック」と同義であるか, また, 19世紀の中国都市に国家から独立した公共領域があったのかと疑問に思う研究者もいた。それにもかかわらず, ウィリアム・ロウの草分け的研究はその後の中国都市研究に大いに影響を与えた。後に, 中国都市の近代化に関する議論は, 沿海地帯の条約港だけにとどまらず, 多様性を持つようになった。さらに, より伝統的な, 条約港ではない都市や内陸部の都市の研究へ関心を持つ人々が増えた。

都市の歴史, 特に清末と民国期の都市の変化に学問的関心が集まったことは, 1980年代の中国の改革・開放とも関係が深い。イタリアの歴史家のB・クロチェ (B. Croce) が述べたとおり, すべての歴史は現代史であり, 私たちは現在の立場からのみ過去を理解できる。したがって, 私たちの時代の変化もまた過去の思想について振り返る機会を与えてくれるのである。

中華人民共和国の発足から30年間, アメリカにおける中国研究は共産革命の勝利を説明することに焦点を当ててきた。明清時代と20世紀の歴史に関する多くの研究のテーマと議論をみれば, 研究者がいかにかこの革命の始まりと発展を説明しようとしたかがわかるだろう。この時代, 農村社会研究が注目されたことは, 中国共産党が農民の支持を得て全国的な影響力を獲得したことと深い関わりを持つ。対照的に, 民国期の歴史には学問的関心がほとんど向けられなかった。それでも少なからず研究がなされていたが, 国民党が自己の落ち度によってどのように衰えていったのかというテーマであった。

一方, 20世紀初頭の中国における都市社会はほとんど考慮されなかった。1980年代の中国の改革により, アメリカの知識人たちはそれまでの中国史に関する考え方をさえざるを得なかったのである。中国の民衆が熱狂的に近代化を欲する姿を見て, 研究者は20世紀初頭の歴史を再評価する必要を感じた。こうしたなかで, アメリカにおける中国研究にパラダイム転換がおこり, 共産革命の解釈は近代化の解釈の陰に退いていったのである。

この点からすると、民国時代の歴史は、単に国民党が腐敗から失敗に至ったというだけでなく、中国人が自国を近代化しようとした初期の様々な試みを含み込んでいる。都市が近代化発生の主たる場所であることから、おのずと近代中国史に焦点が当てられるようになった。それゆえ、アメリカの研究者の次なる関心事は、時代の移り変わりとともに歩む都市と都市の近代化の問題へと移っていった。

都市史の研究は、国内の学問的発達と中国の新たな状況により促進され、研究の確固たる骨組みを作ってきたと言える。以下に、この分野の代表的な研究を紹介していきたい。こうした研究のなかでの事例の選択、議論、資料の利用などを分析することで、私たちはアメリカにおける都市史研究の特徴を理解できるだろう。

2. 民国時代の都市歴史学

「19世紀の中国都市には公共領域が存在したのか」という議論があったのは上述のとおりである。ウィリアム・ロウには異論を唱える者も多かったが、清時代後期および民国時代の歴史研究家は彼の思想に共鳴した。そのひとつが、ディクソン・カレッジ教授のデビッド・ストランド (David Strand) の著書『人力車の北京：1920年代の都市住民および政治 (Rickshaw Beijing: City People and Politics in the 1920s)』で、彼は都市コミュニティ政治および公共領域について説得力のある議論を展開している³⁾。

第一に、デビッド・ストランドの調査地選択がとても面白い。1920年代の北京はもはや帝国政府のある場所ではなく、かといって中国の新たな首都ともなりえていなかった。将軍は全国土を支配する力を失いつつあった。そして、国民党の勝利によりその首都の名は失われるのである。一方、上海のような条約港に比べて北京では物資が格段に少なかった。ストランドは、北京の主要な交通手段であった人力車を、近代的メカニズムと人的労働力が同居するものにとらえ、それを近代化の入り口でさまよう不思議な古都の比喩として使ったのである。

ストランドが選んだのは、この状態の北京であり、彼は国家と都市社会との関係の考察を行った。それは、この時点においてのみ、都市が国家政治に圧倒されることなく、地域住民に注意をむけることができたからだ。本書は、西洋の学問の特徴を明らかにしている。すなわち、大理論を持ってきても調査地には必ずしもそれが当てはまらないということだ。反対に、何らかの理由で周縁化された調査地は、しばしば投錨点として最適である。1920年代は将軍支配の時代であったが、都市における公共領域の発展は国家の代表性が欠如していたためではないことは特筆に値する。ストランドの研究は、国家は単なる上位レベルの政府機関以上のものであることを気付かせてくれた。地域コミュニティにとっては、下位レベルの政府組織の発展のほうがより重要である。

清末の改革が始まると、最も発展したのは基礎的政府機関であった。諸都市においてそれが顕著となったのは、警察の設立だ。著者によると、西洋および日本から持ち込まれたこの制度は、都市住民にとっては国家体制と彼らとの媒介役となり、また社会を支配し思想教化する権限を付与されていた。北京の警察は、かつて衙門に限られていた国家権力の範囲を近隣社会や街路にまで拡大させ、交通整理をしたり、家族内や近隣の間関係の調停を行った。

一方、都市においては公共の場も拡大した。清末より、さまざまな市民組織が合法化され、都市生活において活発に活動するようになった。人力車夫の間にも一定の組織が出現したほどである。将軍たちが闘っている間にも、市民組織は都市の自治権を獲得していった。例えば、商人が支配する大規模な商工会では、資金を集めて将軍に賄賂を渡し、軍人の都市侵入を止めさせた。さらには、市民組織が都市運営に大きな影響を与えていたのも非常に重要な点である。都市の警察組織の財源のほとんどは北京の商人組織が提供していたので、商人たちは地方政府からの命令を聞くだけでなく、政府と相互に作用しうる支配力のある地位にもあったのである。

デビッド・ストランドによる都市社会の考察は、市民組織同士の連帯と、利害対立による組

織同士の紛争、という2点に注意を促す。紛争の中心は、近代的な交通手段の導入の場面に見られた。都市にとって、路面電車の導入は交通の近代化への大きな一歩となった。しかし、これは都市住民全てに支持されたわけではなかった。商人たちは路面電車の導入に積極的だったが、人力車夫は、それを自分達の客を奪い、生活を脅かすものと考え、抵抗していた。この二者の対立は1920年代後半の大暴動にまで発展し、人力車夫らが路面電車を攻撃し、破壊したのである。この研究は、活気ある都市社会を、都市インフラの近代化、近代的民衆政治、そして市民社会の発展を巧妙に織り込んだ描写を含んでいる。

漢口と北京の研究が顕著な成果を収めたため、アメリカにおける中国研究者の次なる視線は上海研究に向けられた。カリフォルニア大学バークレー校の研究者が上海社会科学院の協力を得て、上海に関する体系的な研究を始めた。フレデリック・ウェイクマン (Frederick Wakeman) 教授の著書、『上海の政治、1927年～1937年(Policing Shanghai, 1927-1937)』は、このテーマに関する出版物でも影響力の大きいものである。

ウェイクマンは、明清交代期の劇的な歴史に関する研究で1970年に高く評価された人物である。彼は、清代の都市に公共領域があったか否か、という疑問を唱えることで、都市史のジャンルに注目を集めていった。彼は国家と社会の関係に関心を持っていたが、そのアプローチは上掲の研究者とは異なっていた。彼の著書では、都市コミュニティがいかにか国家からの自治権を獲得したかではなく、近代国家がいかにか効率的に社会を支配しようとしたかに焦点が当てられている。上海を調査対象としたことで、それが例外的な事例とならずに済んだ。また、国民党政府が中国最大の条約港をいかにか支配しようとしたかを、当時の国際情勢と絡めて分析した。

彼の分析によって、1927年の発足以降、国民党政府は、それまで西洋が支配的だった国際社会のなかで中国の地位を獲得するため熱心に努力をしたことがわかる。国民党政府は大都市・上海を支配する能力を示すことで、政府の影響力を対外的に示すことができると考えた。ウエ

イクマンは檔案その他の基礎的資料を大量に使い、上海警察がこの任務を果たすために組織されたが、結局は失敗に終わったことを示した。これは、上海を管理するためには、その都市にはびこる犯罪組織、特に青幫が支配していた阿片密輸の組織犯罪と闘うことになったからだ。

しかし、青幫の誕生は、上海に多くの外国人居留地があったことと直接的に関連がある。これら「都市の中の都市」があったため、上海の都市運営と司法執行力は分散し、また治外法権によって法を逃れられるために、裏での犯罪取引が容易に行われるようになった。さらには、上海警察は、外国人居留地を逃げ場としたギャングたちを処罰することができないと悟っただけではなく、同様に外国人居留地に隠れていた共産主義者やそのほかの革命分子を捕らえるために、マフィア組織に助けを借りていた。

青幫が上海警察に影響力を持っていたのは、彼らが居留地に長く潜入していたからである。国民党にとっての最大の敵を排除するため、上海警察は青幫の阿片密売その他の犯罪行為を黙認していた。著者は、こうした「悪魔に包含される」状態が続いたため、マフィア組織は警察による制御が不可能となったために組織が拡大していき、結果として国家権力の犯罪化を招いたと示唆している。上海警察が犯罪組織と手を結んだことで、国民党が遂行した政治や道徳的合法化は破壊されてしまった。

彼の研究により、国家と社会との相互作用は都市内部の問題に留まらず、しばしば帝国主義的侵略と国家建設に反して起こるものだったことがわかる。上海などの条約港では、帝国主義勢力が直接その姿を見せることで、国家と社会の関係がきわめて複雑なものになってしまった。

ウェイクマンらは研究者として成熟しており、上海研究に移る前にすでに多くの著作を発表していたので、彼らの上海研究は最初からとてもレベルの高いものだった。彼らの著作や論文は、清末および民国期の上海の魅力を十分に引き出しており、それゆえ上海はさらに研究者の注目を集めることになった。一方、上海はほかの都市とは比較にならないほど、中国近代史のなかで名声を博し重要な場所と認識された。さまざまな理由から、上海には幸い多くの檔案

やその他の文書が残っていた。そのため、さらに多くの研究者が上海にひきつけられ、都市の近代化に関連する豊かな歴史的資料を利用しようとした。約20年の研究を経て、現在、上海は都市史研究のなかでも特別の位置にある。それは、パリやニューヨークといった国際的大都市の研究に匹敵するものである。清末以降の上海の歴史は、多くの研究の対象となり、それとともに、研究テーマもまた多様化した。

古いテーマに新たな視点を加えた者もいた。例えば、共産党の潜在活動とマフィアとの関係を、都市コミュニティ政治の枠組みでとらえる試みであり、それは旧来の政治史や秘密社会研究に新たな光を放った⁴⁾。また、消費文化等の新たな分野の研究が開始されるなかで、上海の有名なショッピングストリートである南京路に関する研究が増えた⁵⁾。それとは対照的に、ネオンの光の外側に目を向けて、上海住民の日常生活を研究する者もいた⁶⁾。なかでも研究者の注目を浴びたのは、地縁的な紐帯が同郷人同士の結合を促進する一方で、異なる地域の出身者の間の関係に亀裂が生じさせるという問題であった。

カリフォルニア大学サンタクルス校教授のエミリー・ホニッグ (Emily Honig) は、上海の綿工場で働く女性労働者の研究から、労働者は同一の階級に属するにもかかわらず、しばしば彼女らは仲間を「姉妹」とは認識していなかったという。江北出身の労働者は、江南出身の労働者から差別をうけた。このような出身地差別は、ホニッグの第二著書で詳しく書かれているが、上海に住む蘇北の人びとがいくつかの少数民族の特徴をもつ弱小集団として、かなりの程度認識されていたという⁷⁾。また、同郷集団が、上海に僑居する者のアイデンティティ形成に果たした役割や、彼らがコミュニティ政治や国家レベルの政治運動に参加するときの重要な機能を担ったことを力説する研究者もいた⁸⁾。

上海研究のもうひとつのハイライトが、女性とセクシュアリティである。この代表が、カリフォルニア大学サンタクルス校教授のゲイル・ハーシャッター (Gail Hershatter) による『危険な快楽：20世紀の上海における売春とモダニティ (Dangerous Pleasure: Prostitution and

Modernity in Twentieth-Century Shanghai)』である。ハーシャッターは、共和国体制の上海においては、工業生産部門よりも性産業でより多くの女性が雇われたことを指摘した。売春産業の興隆は、上海に来た移民たちの性差が不均衡であったことに関連するだけでなく、社会生活の空間的制約を示している。良家の子女がなお家庭のなかに閉じ込められていた時、高級な売春宿は歓楽と商談のために男女が混ざり合う空間を提供していた⁹⁾。

著書『中国の啓蒙の中の女性たち：口述と文字の歴史 (Women in Chinese Enlightenment: Oral and Textual Histories)』のなかで、ミシガン大学の王政 (Wang Zheng) 教授は、教育を受けた上海女性たちの生活経験の分析を通じて女性とモダニティを論じている。彼女の研究は数名の女性の生活に焦点を当て、文献研究とインタビューとを組み合わせた、人類学者がよく使う手法で行われている。そして、上海の近代的教育機関、メディアと出版業界、政治機関の3つが、女性に家庭の外で働く機会を与えたことを示した。しかし、女性たちはこれら近代的機関から利益を受けたというだけでなく、職業や結婚について為された彼女たちの選択は、大都市の近代的特点の一部を構成した¹⁰⁾。

上海の女性とセクシュアリティに関する研究は、アメリカのほかの学問領域と同じく、フェミニズムが中国研究のなかでも影響力を持っていることを示し、中国研究においても、もはや周辺分野ではなく主流分野となったセクシュアリティ研究に焦点が当てられたことを表している。

1990年代後期以降、アメリカにおける上海研究は次第に政治体制と社会組織の分析から、都市空間と近代文化の分析へ重点が移ってきた。ウェイクマンが述べるように、上海は20世紀初頭の中国において唯一の近代的大都市であったため、中国社会の近代の変容を研究しようとするさまざまな学問分野の研究者たちが上海に注目したのも不思議なことではない。

特に、文学研究者が歴史家と協力し始めたことが重要だ。文学者が歴史に興味を持ったのは、最近の文学研究において流行している新歴史主義と深い関連がある。このアプローチは、特定

の歴史的状況のなかで文学作品を解釈するというものである。そのため、文学者らは、上海で書かれた文学作品を解釈するに際して、その都市の近代的な物的環境とコスモポリタンな文化環境に注目した。そして、それまでの上海の社会史研究に欠落していた、物質文化と都市空間の問題に取り組んだ。

その特徴を論じているのが、ハーヴァード大学の李欧梵（Leo Ou-fan Lee）教授が1999年に発表した著書『上海モダン：新都市文化の開花，1930年～1945年（Shanghai Modern: The Flowering of New Urban Culture, 1930-1945）』である¹¹⁾。1970年代初頭、李はすでに民国時代の浪漫派作家の研究で著名であった。この著書は彼の初期の著書とは異なり、単なる文章の分析にとどまらない。上海在住の作家に対する李教授の読解方法は、都市空間と生活のリズムの理解に基づいている。彼は1930年代から1940年代の上海を観察したが、それは上海における物的環境が他に類を見ないほどモダンであったことを強調している。高層ビルの技術と芸術的スタイルから最新モデルの自動車に至るまで、最新技術とファッションは、それらが欧米で出現するのとほぼ同時に上海に輸入されていた。したがって、上海は他の中国都市と大きく異なっているだけでなく、また世界中で最も前衛的な都市のひとつであったことがわかる。並木道の喫茶店から、さまざまな外国語の書物が陳列された本屋から、活気に満ちたダンスホールに至るまで、李の描写は、発達した出版業界が西洋と日本の文学潮流と表現方法の最新情報を作家たちに提供し、そして近代の物的環境が作家たちの想像力と創作力をかきたてる状況が上海に存在したことを表現している。

このような都市空間のなかで、人びとは常に技術発展の刺激と商業文化の普及に向かい合ってきた。上海在住作家の作品には、この大都市の近代化への複雑なまなざしが現れている。すなわち、それらの作品には、社会の進歩を信じるとともに、とどめようもない近代化を目のみにした個人の不安や無力感がうかがえるのである。

やや遅れて、カリフォルニア大学ロスアンジェルス校の史淑梅（Shu-mei Shih）教授も、

上海の物質文化と上海学派の作家たちを関連づけて分析し、『モダンの誘惑：準植民地状況の中国でモダニズムを書く，1917年～1937年（Lure of the Modern: Writing Modernism in Semicolonial China, 1917-1937）』を発表した¹²⁾。彼女はさらに、上海学派とそれに対立する北京学派を比較し、2つのグループの作家の間に見られる違いは、両都市の異なった物的状況や文化的状況によるものだろうと指摘している。こうした文学的現象を都市景観に関連させることは明らかに、上海研究に対して、物的側面に加えて、文化的側面の広がりを与与する手助けとなるであろう。

上海研究が充実して学問的注目を集めると、それに対する批判的な見解も出されるようになった。上海に関する出版物の増大にともなう問題は、上海が英文文献のなかで過度に重要な位置に置かれることであった。この学問分野が上海研究によって盛り上げられると、人々は中国の諸都市を議論するつもりでも、つつい上海だけを取り上げる傾向に陥った。伝統的に、アメリカの研究者は数々の詳細な事例研究から普遍的な結論を推定するのだが、ここで起こる疑問は、清末および民国期の中国という大きな対象を理解するとき、果たして上海が最良の窓となりうるのかということだ。その答えは「イエス」ではないだろう。上海は確かに中国近代史に大きな影響力を持っていたが、それは中国都市としての典型性というよりは独自性によるものだ。この大都市が19世紀中葉から急成長を遂げたことは、多くの伝統的都市が経験した困難の数々とは全く対照的であるだけでなく、中国の多くの条約港のなかでも奇跡的なことであった。ニューヨークがアメリカ史のなかで独自性を持っていたのと同様、中国近代史のなかでの上海の重要性はその代表性というよりは独自性からくるものだ。したがって、中国の他都市をしっかりと研究しなければ、近代の中国都市に対する理解も進まないだろう。

1990年代になると、多くの研究者がこの問題に気づき、都市史のアンバランスを修正しようとした。この一例が、論集『中国都市の再生：モダニティと国家アイデンティティ，1900年～1950年（Remaking the Chinese City:

Modernity and National Identity, 1900-1950)』である¹³⁾。同書の編者でカリフォルニア大学サンディエゴ校のジョセフ・エシェリック (Joseph Esherick) 教授は、清末の改革と1911年の革命、そしてボクサー暴動の研究で知られている。

この論集の寄稿者の多くは博士号を取得したばかりの若い研究者だった。そのため、寄稿された論文の多くは何年にもわたって研究してきた成果である博士論文をベースにしており、資料研究の深さを示すことができた。さらには、この論集で調査対象となっている都市のタイプが多岐にわたり、清末と民国期の都市の変容の多様性と複雑さを示していることも重要だ。この論集では、10都市について11の事例研究が行われている。すなわち、広州、天津、長春、成都、杭州、北京、南京、武漢、重慶、の10都市を対象とした論文、及び上海研究者による、近代中国都市史における上海の定義に関する論文だ。これらの都市は、沿海部の重要な条約港から内陸都市まで、国家政治の中心地から主に商業、交通、観光の中心地として機能した都市までを網羅している。そのため、ひとつの都市のみを研究する通常のアプローチを超えた研究が可能になり、上海だけに焦点を当てていたのでは考察が難しい重要な理論的課題を論じることができるのである。

著者らは、特定の都市で起きた変化と大規模な政治・文化的変容との関連に重点を置いている。民国期は政治的に不安定で内紛が多く、多くの都市の劇的変容は国民国家の建設と存続とに関連していた。本書のなかの事例のいくつかは、国家の政治的中心地のシフトを扱っており、首都が移転するときの北京、南京、武漢、重慶の変容を分析している。その結果、国民党が国民国家を建設しようと画策し、それが首都であった都市の都市景観に大きな影響を与えたことがわかる。それは都市計画、建築様式、都市内の道路の名前などにも重大な影響を与える決定的要素であった。

また、本書のなかには西洋と日本による植民地・準植民地支配が中国都市の近代化に与えた影響を議論している論文もある。例えば、天津の近代的衛生施設が都市のなかで極めてアンバランスに普及したことは、この都市が多くの外

国人居留地により細分化されており、その結果、自治体運営が混沌としたことと関連がある。また、中国東北部での日本の植民地支配を考慮せずには、長春がその地方で交通の要所となった経緯は理解できないだろう。

論集のタイトルにあるように、本書の特徴のひとつは、中国の都市がいかに物理的に「再生」されたかにある。編者と著者らは20世紀初頭に出現した新たな社会集団とその活動を無視したわけではないが、むしろこの時代に伝統的都市の物理的な形状がいかに変わり、また修復されていったかに注目した。寄稿者の多くが、都市計画と空間の変遷をテーマに各都市を研究した。彼らは、道路の拡張や新たな交通手段の導入といった都市の基本的施設の近代化に着目した。詳細な研究により、近代的な商業の中心地が発生し、伝統的な市場が新たなスペースに変わったことに対する政治的社会的背景、都市の空間的配置が変化したことによる連鎖反応などが描かれている。

都市の外観を物質面から研究することは、上海よりもさらに伝統的な都市において、いかに近代化が起こったかを知る手段となる。さらには、この研究により私たちはモダニティの意味、そしてモダニティと伝統の関連について考えさせられる。いくつかの研究が明らかにしているように、現在、私たちが伝統的だと考えているものの多くが実際には前世紀の近代化の過程で「作られた」ものなのだ。換言すれば、それらは「発明された伝統」なのである。したがって、伝統とモダニティは互いに対立するものではなく、別々の時代に属するものなのだ。彼らは相互に定義づけられ、現代に共存している。

『中国都市の再生』が出版された前後、寄稿者の何人かはそれぞれの博士論文をもとに都市史の単著を出版した。『中国における国家、統治、モダニティ：広東、1900年～1927年 (Nation, Governance and Modernity in China: Canton, 1900-1927)』を出版したノース・カロライナ大学のマイケル・ツィン (Michael Tsin) 教授は、20世紀初頭の広州における国家と社会の関係を論じている。彼は、国民国家が近代的現象であるのと同様に、社会もまた新しい概念であると指摘した。広州で

は、商人や他のグループは、地方政府との相互作用や紛争を通じて、社会という感覚を形成した。1920年代の商人と広州の革命政府との紛争では、市民グループは社会という名前を使って、彼らを支配し資源を搾取しようとする国家と闘った¹⁴⁾。

彼の後、ケンタッキー大学のクリスティン・ステープルトン(Kristin Stapleton)教授は、『成都の文明化：中国都市の改革，1895年～1937年 (Civilizing Chengdu: Chinese Urban Reform, 1895-1937)』を発表した。それによると、清末に出された新政策が成都などの地方都市での近代的改革に決定的な影響を与えたことがわかる。都市計画や市民行為の近代化を推進する人びとの中には、啓蒙された知識階級のみならず、楊森 (Yang Shen) などの地方の将軍も含まれていたことは意味深い¹⁵⁾。

2003年、ワシントン大学シアトル校のマデレーン・ユ・ドン (Madeleine Yue Dong) 教授、そしてウィスコンシン大学のブレット・シーハン (Brett Sheehan) 教授は、北京と天津の研究をそれぞれ出版した。ドン教授の著書、『民国の北京：都市とその歴史 (Republican Beijing: The City and Its Histories)』は、デビッド・ストランドの研究をなぞり、首都としての地位を失った後の古都の状況を分析している。それによると、北京は近代的交通手段や空間の発展は経験したものの、その都市の政治的重要性を失ったために経済が落ち込んでしまった。この状況で、中古品の交易がその都市の商業と都市生活において重要性を持つようになった。著者は、古物売買は文化的伝統に形を与えることになり、こうした伝統のリサイクルこそがモダニティの一側面なのだと論じている¹⁶⁾。

停滞した北京とは対照的に、ブレット・シーハンの著書『混乱期の信用：共和国時代の天津におけるカネ、銀行、そして国家・社会関係 (Trust in Trouble Times: Money, Banks and State-Society Relations in Republican Tianjin)』では、繁栄した条約港である天津とその銀行が中国北部で支配的な役割を担っていたという研究が行われた。近代的金融機関である銀行は、都市の経済生活と深い関わりがあるだけでなく、政治状況にも機微に反応する。す

なわち、銀行は国家・社会関係を分析するのによい水路となるのだ。政治的に不安定な時期に天津の銀行をあやつった人びとを分析し、銀行家たちはその生き残りのために、国家から銀行が独立した状態を必死になって保とうとしていたと書く¹⁷⁾。

以上の研究は、さまざまな新しい手法を用いて民国期の都市社会に詳細な考察を加え、重要な理論的問題への道標を与えた。これらの新たな研究が次々と発表されることにより、私たちが持つ近代中国都市の知識は確実に広がっていくであろう。

3. 明清時代の都市の研究

ウィリアム・ロウによる漢口の研究には、明清時代の歴史研究者もかなりの関心を持っていた。しかし、さまざまな理由から、明清時代の都市に関する研究が出版されるのは、民国時代の都市研究よりも少し遅れていた。民国時代に関する研究報告が一段落した後に、明朝時代の都市研究が報告されるようになったのである。

1990年代に出版された明清時代の都市に関する研究は少ないが、そのひとつは、ミシガン州立大学のリンダ・クーク・ジョンソン (Linda Cooke Johnson) 教授の編集による論集『帝政後期の中国における江南都市 (Cities of Jiangnan in Late Imperial China)』である。本書のなかには、長江下流域の主要都市に関する論文が収められている。すなわち、蘇州、揚州、杭州と上海だ。なかでも、夫馬進 (Fuma Susumu) 教授による論文は、明時代後期の杭州の民衆蜂起に関する優れた分析だ。しかし、本書の問題は、鍵概念となる「帝政後期の都市」や「江南の都市」などの定義が明らかでないことだ。論文の多くが旧来型の社会経済史のようであり、都市文化に関する言及は少ない¹⁸⁾。ここからもわかるように、明清時代の都市の研究はまだ始まったばかりなのだ。

1990年代に出た研究のもうひとつが、ジョンソン自身による、19世紀中葉以前の上海に関する研究『上海：市場の町から条約港へ，1074年～1858年 (Shanghai: from Market

Town to Treaty Port, 1074-1858)』である。本書は、民国期の上海に関する研究が人気を集めた頃に出版され、そしてそれらの研究を補完する役割を果たしている。上述のように、ほとんどの上海研究者は、上海がすでに誰もが認める国際的な大都市として確立していた20世紀初頭に焦点を当てていた。

ジョンソンの著書は、11世紀から19世紀中盤にかけての上海の発展の軌跡をまとめたものである。本書から、目もくらむような壮麗な近代都市でありながら、その素性を明かすことのない上海は、突然その姿を現したのではないことがわかる。著者は上海を分析し、その源流は宋代以降における江南地区の経済発展にあると述べた。上海は、江南地区の棉紡織業の中心部に近接し、3つの交易ルート一大運河、長江、そして沿海地帯一をつなぐ要衝の地に位置した。こうした戦略的な位置は、江南地区が手工業製品を販出し、代わりに穀物と肥料を販入するといった遠隔地間交易の構造のなかで、上海を重要な市鎮として成長させた。

上海で商業が栄えたことにより、さまざまなギルド（商業団体）ができ、都市の基本的施設が建設されていった。1840年以前にすでに上海は英国との交易に巻き込まれていたが、条約港になってからの発展は、実際にはまだかなり限られたものだった。1853年の小刀会の蜂起が、関税徴収の監督を制御するという口実を与え、しかも、元来、外国人の居住のために設計された租界は、中国人難民を受け入れることにより繁栄するようになった。ジョンソンによる初期上海の研究は、かつては漁村だった所が西洋人の保護を受けて条約港として栄えたという、それまでの上海に関する神話を崩した¹⁹⁾。

しかし、本書にも、上海の過去における連続性を強調し過ぎて、歴史の偶然性と突発性を見落とすという傾向がある。19世紀から20世紀初頭にかけての上海の発展は奇跡的な飛躍であり、小市鎮から大都市へという単線的な歴史観をもって描写することは、その巨大な変貌を単純化し、特異性を失わせることになるのを免れないであろう。

2000年以降、アメリカにおける明清都市史の研究はついに開花した。現在に至るまでの間

に、個別の都市に関して詳細な事例研究を行った多くの研究書が出版されている。なかでも、プリンストン大学のスーザン・ナキン (Susan Naquin) 教授による『北京：寺院と都市生活、1400年～1900年 (Peking: Temples and City Life, 1400-1900)』は、こうした研究の可能性をよく示す事例である²⁰⁾。

この大著には、明清時代の北京の歴史、及び寺院と都市生活の関係の歴史、の両方が含まれている。北京に関する著者の研究は、歴史の連続性を考慮しているが、いくつかのきわめて重要な歴史的瞬間に起こった大変動にも注目している。現在、北京は古都としての名声を得ているが、ナキンによれば、永楽帝が帝国の新たな首都と定める以前は、北京は単なる辺境の一都市にすぎなかったという。その都市は15世紀初頭にオーソドックスな帝国首都のモデルにしたがって建設されたが、その役割が確立されるまでには、それから約200年を要した。明末になってから、特徴的な文化を持つ本来の大都市になったのだ。しかし、その時までには明朝はその統治能力を失いつつあった。明清両王朝の交替に遭遇した北京の経験は、歪んだ歴史の断絶であった。

北京は、満州族によって樹立された清朝の軍事統治のもとに置かれた都市であった。朝廷は北京城内の北部エリアである内城全体を旗人の居住地として設定したが、それは旗人と漢族との間に大きな断層と空間的分離の状況を作り出した。著者によれば、30万人を下らない住民が内城から追い出され、混み合った南城（北京城内の南部エリア）と郊外に新たに家を探さなければならなかった。一方、同じ数の旗人が北京に移住するよう命じられ、人びとは慣れない都市生活を始めた。重要なのは、北京社会が朝廷の意向に従順ではなく、18世紀の頃には旗人と漢族との間の障壁を弱めていったことである。漢族の庶民は次第に内城のなかに侵入し、旗人の家を借りて店を開き、逆に旗人も南城（北京城の南部エリア）に移って地域活動に加わるようになった。本書の中で最も価値ある観察は、旗人が北京において辺境人から本地人へと変わっていったということだ。そして、そのプロセスは同時に北京の文化をも変えた。旗人の

定住は、多様性と多民族共生を特徴とする清代の北京文化に大きな影響を与えたのである。

スーザン・ナキンは、北京を寺廟と都市生活に重点を置いて研究した。これは既存の都市研究においてもユニークな視角である。それは彼女のこれまでの調査経験によるもので、彼女は1970年代から中国北部の民間宗教の研究でよく知られている。また、彼女は北京図書館にある寺廟の建設と修復に関する文書を広範囲に渡って資料として使用した。これらの資料から、彼女は寺廟とその都市の社会、政治、経済、そして文化活動との関連を明らかにした。

北京は帝国の首都であったため、都市生活における王宮の役割は、この研究に重要かつ避けられない問題だ。著者はこれに答えるため、北京でいかに宮廷が寺院を保護したかを分析している。その結果、公式に認められた宗教施設を保護した場合を除けば、明朝は寺廟を保護したもののその範囲は限られていることが判明した。これは明の皇帝が王朝の奥深くに隠れて北京社会とは隔絶していたからだと思われる。宮廷が寺院を保護するとき、それはしばしば宮廷の誰かの個人的な宗教的関心によるものであった。特に皇家の女性たちと太監が顕著に寺院を保護した。これに対し、清朝の宮廷はより積極的に北京の宗教問題に関わり、寺院の保護はたいてい皇帝が決断した。こうして、清朝の宮廷は都市社会により大きな影響を与えていた。こうした変化は、清朝の宮廷がその領域を都市内外に拡大し、また皇帝がしばしば宮城の外に出御したことと関係があるという。戦略的関心または個人的な宗教心から、明清両王朝の皇帝は他の中国都市にはあまり見られない数々の寺廟を建設し、保護し、あるいは黙認していた。すなわち、チベット仏教、イスラム、カトリックの寺廟である。これらさまざまな宗教の寺廟の存在は、北京の文化をさらに多様化させた。

本書のもうひとつの焦点が、社会生活における寺廟の役割、すなわち伝統的中国都市の公共空間のひとつとしての役割である。各種資料から、寺廟の空間が開放されていたため、それが幅広く利用されていたことを著者は指摘している。そして、寺廟は神々と交わる場所であり、定期市、祭り、慈善活動に使われる場所でもあつ

た。寺廟は、都市の経済と文化生活を統合する機能を持っていた。清代の北京では、旗人と漢族と一緒に寺廟を保護しており、これが2つの民族を統合する助けとなっていた。ナキンが示した、寺廟の多様な利用方法は、寺廟が社会集団の形成を促進する役割を担っていたことを強調する。たとえば、清代の都市における主な特徴となった同郷会館は、しばしば寺院のなかに設けられ、あるいは、もともと寺廟として存在していたものである。

そのほか、神会も、寺廟があつてこそ存在できた集団だった。この組織は、特定の寺廟を共同で支援し巡礼を組織するために作られた。神会は当初、明末の北京に現れたが、清末には数十組織を数えるまでになった。寺廟が社会組織を生成する可能性を持っていたとはいえ、スーザン・ナキンは、明清時代の都市においてそれらが「公共領域」を創造する役割を果たしたとは考えていない。寺院を基盤としておびただしいほどの組織はできたものの、それらは分散しており共通の目的を持ったものではなかった。彼女によれば、正確には、寺院の開放性と支援者の分散化のために、こうした集団が組織された政治活動の拠点として機能することはなかったという。

最近、アメリカで出版された明清時代の都市に関する研究のなかに、ジョン・ホプキンス大学のトビー・メイヤー・フォン (Tobie Meyer-Fong) 教授の『清朝時代初期の揚州における文化建設 (Building Culture in Early Qing Yangzhou)』、メルボルン大学のアントニア・フィンネン (Antonia Finnane) 上席講師の『揚州について：ある中国の都市、1500年 - 1850年 (Speaking of Yangzhou: A Chinese City, 1500-1850)』がある。どちらも揚州に関するものだが、著者らの研究方法の視角はかなり異なる。結果として、この2冊はこの清朝時代の重要都市に関する全体像を見せてくれるのだ。

トビー・メイヤー・フォンの著書は文化史で、若手研究者に人気を博した。長期間に及んで分析する帝国主義後期の中国における都市史研究とは違い、本書は清朝時代の数十年間の揚州に焦点を当てている。一方、著者はその都市の全体像を描こうとしていない。むしろ、彼女は

揚州を使って、王朝崩壊による大変動の後、エリートたちがいかに彼らの文化を再建したかを描こうとしている。思慮に富んだ各章は、揚州の景勝地をめぐる物質面と文章面での関係がどのように再建されたかを明らかにしている。すなわち、戦争の後、文人や官僚が揚州に集まり、彼らが熟知している方法でその都市の文化的名声を回復しようとした。特定の場所と有名な歴史的人物を関連させ、それに関してエッセイや詩を書いたのである。彼らは、個人的名声のため、またエリートコミュニティと文化的アイデンティティの再建のためにそれらの活動を行った。そのメンバーには地元の人々と多くの外来の居留者が含まれたが、前王朝に忠誠を示す者もいれば新王朝に仕える者もいた。しかし、彼らはともに文化の再建にむけて協力した。再建を目指した文化的伝統とは、地方と王朝の境界を超えるものであった。しかし、このようなエリートの主導権は短命だった。18世紀までに、揚州の景勝地は裕福な塩商人がスポンサーとなって、皇帝の文化的趣味に沿うように作られていったと著者は述べている²¹⁾。

アントニア・フィネンの『揚州について』は、都市社会史以上のものであり、それを読めば明清時代の揚州に関する基礎的情報が得られる。揚州の初期の歴史と地理的位置を研究し、この都市が常に帝国の産物であったと著者は指摘する。揚州は大運河や塩の専売で利益を得たが、この二者は帝国政府によって維持される人工的な仕組みであった。そのため、揚州ではいくつかの皮肉が連続しているようだ。江南文化を持つ江北の都市であり、また貧困にあえぐ地方に大富豪が存在し、弱い本地人が支配的な客商に従属していたことである。

彼女の分析によれば、大運河があったから江南と揚州の往来が容易になったというだけではなく、江南の文人は揚州の巨大な財富に引きつけられたのだという。塩商人は文人からサービスや芸術品を買い、それが揚州に江南都市の特色を持たせた。同時に、蘇北に位置する揚州の地理的位置は、あまり周辺地域に恵みをもたらすものではなかった。後背地との関係は、塩税を徴収するくらいだった。都市内部では、徽州出身の塩商人たちが明代中葉から力を持つよう

になった。清代には、揚州はほとんど徽州出身の商人の「植民地」となってしまった。徽州の塩商人たちはこの都市の富を支配して種々の公共事業を指揮するようになり、ほとんどの本地人は貧しく、客商に仕えて生計をたてるより他になかったのである。

それゆえ、明清時代には社会的流動性が増大したために社会関係の境界が曖昧になったという考えにフィネンは疑問を投げかけ、揚州では、徽州出身の商人と本地人との間に顕著な社会的差異が認められたと指摘している。こうした差異は性関係にも及び、富商の要求から、揚州では女性の売買が有名なビジネスとなった。しかし、他方で、著者は、官僚の阮元(Ruan Yuan)に代表されるローカル・エリートの成長にも言及し、地方文化に対する彼らの貢献を記述している。結果的に、揚州の運命は帝国の衰退とともに終焉を迎えた。19世紀中葉には、帝国政府がもはや塩の専売と大運河を維持できなくなり、揚州は有力な支援を失って急激に衰退していったのである²²⁾。

総じて言えば、アメリカにおける中国都市の研究は過去20年間にわたり大きく発展した。多くの個別研究の出版により、現在、私たちは中国の都市社会に関する知識の骨組みを知ることができる。中国史は、継続的な都市史の視野の広がりから、確実に恩恵をこうむるだろう。さらに多くの都市、特に辺境や内陸部の都市研究がなされるべきである。しかし、これらの都市研究をいかに中国の歴史のなかに戻すのかも考えなければならない。中国都市に関する私たちの知識が、どのように大きな物語を書き直す助けとなるのか、それを考える必要があるであろう。

注

1. Rhoads Murphey, *The Treaty Ports and China's Modernization: What Went Wrong?* University of Michigan Press, 1970.
2. William Rowe, *Hankow: Commerce and Society in a Chinese City, 1796-1889*, Stanford University Press, 1984. William Rowe, *Hankow: Conflict and Community in a Chinese*

- City, 1796-1895, Stanford University Press, 1989
3. *Rickshaw Beijing: City People and Politics in the 1920s*, University of California Press, 1989.
 4. Brian Martin, *The Shanghai Green Gang: Politics and Organized Crime, 1919-1937*, University of California Press, 1996. Patricia Stranahan, *Underground: The Shanghai Communist Party and the Politics of Survival, 1927-1937*, Rowman and Littlefield Publishers, 1998. Frederic Wakeman, *The Shanghai Badlands: War Time Terrorism and Urban Crime, 1937-1941*, Cambridge University Press, 1996.
 5. Sherman Cochran ed., *Inventing Nanjing Road: Commercial Culture in Shanghai, 1900-1945*, Cornell University East Asian Program, 1999.
 6. Hanchao Lu, *Beyond the Neon Lights, Everyday Shanghai in the Early Twentieth Century*, University of California Press, 1999.
 7. Emily Honig, *Sisters and Strangers: Women in the Shanghai Cotton Mills, 1919-1949*, Stanford University Press, 1986. Emily Honig, *Creating Chinese Ethnicity, Subei People in Shanghai, 1850-1992*, Yale University Press, 1992.
 8. Frederic Wakeman, Jr. and Wen-hsin Yeh, eds., *Shanghai Sojourners*, University of California Press, 1992. Christian Henriot, *Shanghai, 1927-1937: Municipal Power, Locality and Modernization*, University of California Press, 1993. Bryna Goodman, *Native Place, City, and Nation: Regional Networks and Identities in Shanghai, 1853-1937*, University of California Press, 1995.
 9. Gail Hershatter, *Dangerous Pleasure: Prostitution and Modernity in Twentieth-Century Shanghai*, University of California Press, 1997. 妓女と性の文化に関しては、_Christiban Henriot, *Prostitution and Sexuality in Shanghai: A Social History, 1849-1949*, Cambridge University Press, 2001., を参照していただきたい。
 10. Wang Zhen, *Women and Chinese Modernity*.
 11. Leo Ou-fan Lee, *Shanghai Modern: The Flowering of a New Urban Culture in China, 1930-1945*, Harvard University Press, 1999.
 12. Shu-mei Shih, *The Lure of the Modern: Writing Modernism in Semicolonial China, 1917-1937*, University of California Press, 2001.
 13. Joseph Esherick ed., *Remaking the Chinese City: Modernity and National Identity, 1900-1950*, University of Hawaii, 2000.
 14. Michael Tsin, *Nation, Governance, and Modernity in China: Canton, 1900-1927*, Stanford University Press, 1999.
 15. Kristin Stapleton, *Civilizing Chengdu: Chinese Urban Reform, 1895-1937*, Harvard University Asian Center, 2000.
 16. Madeliene Yue Dong, *Republican Beijing: the City and Its Histories*, University of California Press, 2003.
 17. Bett Sheehan, *Trust in Trouble Times: Money, Banks, and State-Society Relations in Republican Tianjin*, Harvard University Press, 2003.
 18. Linda Cooke Johnson ed., *Cities of Jiangnan in Late Imperial China*, State University of New York Press, 1993.
 19. Linda Cooke Johnson, *Shanghai: from Market Town to Treat port, 1074-1858*, Stanford University Press, 1995.
 20. Susan Naquin, *Peking: Temples and City Life, 1400-1900*, University of California Press, 2000.
 21. Tobie Meyer-Fong, *Building Culture in Early Qing Yangzhou*, Stanford University Press, 2003.
 22. Antonia Finnane, *Speaking of Yangzhou: A Chinese City, 1500-1850*, Harvard University Asian Center, 2004.

American Scholarship on Chinese Cities

Liping WANG

During the last two decades, Chinese studies in the United States witnessed exciting developments in the area of urban history. A significant number of books and articles have been published on this subject. The new scholarship tends to focus on Chinese urban society of the last five centuries, especially the Qing and the Republican period. This review article first analyzes the reasons for such developments, and then introduces important trends and works on Chinese cities in Republican and late imperial China respectively, and provides some critical views and suggestions for the further development of the study of Chinese urban history.

Keywords : Chinese cities, Chinese urban history, American Scholarship, Late Imperial China, Republican China